ISSN 1344-9087

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第34号

●目次●

論点：ロシア科学アカデミー・シベリア支部創設50周年記念式典参加記 1
最近のセンター研究会・講演会 2
プロジェクト研究部門　研究会 3-4
日本館だより 4
最近のセンター出版物 5
センター客員教授紹介 6
センター新メンバー 7
活動風景・編集後記 8

ロシア科学アカデミー・シベリア支部創設50周年記念式典参加記

東北アジア研究センター 副センター長、教授　岡　洋樹

式典会場にて（右からクズネツォフ教授、ドブレツォフ総裁、岡、寺山准教授）

ロシア・ノヴォシビルスクにあるロシア科学アカデミー・シベリア支部は、1957年に創設されたロシアでも有数の研究機関であり、本年創設50周年を迎える。

1992年の東北大学とロシア科学アカデミー・シベリア支部との大学間学術交流協定締結と、1996年5月の東北アジア研究センター設置によって、シベリアと本学との学術交流が開始された。本年夏には、三度目の更新が行われるが、この間両機関の間では、シベリア支部総裁と東北大学総長の相互訪問が行われている。またノヴォシビルスクには当時の無機化学研究所長クズネツォフ教授の尽力で東北アジア研究センター・シベリア連絡事務所が同研究所内に設置され、研究交流などに活用されてきたことは、すでに「うしとら」誌上で紹介されている。

東北アジア懇話会でも、これまで訪問団を組織し、シベリア支部の研究成果や技術を日本に紹介するための活動を展開してきた。その意味で、シベリアとの交流は、大学の研究ばかりでなく、広く社会とのつながりの中で進められてきたと言えるだろう。

このほどシベリア支部創設50周年記念式典が開催され、東北大学井上明久総長の祝辞代読のため、筆者は本センターの寺山恭輔准教授、徳田由佳子助手とともにノヴォシビルスクを訪問した。6月1～2日にノヴォシビルスクのアカデムゴロドグ内にある学者宮殿で開催された式典は、ロシア連邦政府・地方政府・アカデミーの代表、外国の来賓を初めとする人々が、時にコンサートなどのアトラクションを挟みながら、2日間延々と祝辞を述べるというものであった。壇上にはシベリア支部のドブレツォフ総裁が席に着き、次々に壇上に上がる各界の代表の祝辞を聞き、贈り物を受け取った。祝辞を述べた人々はその場で贈り物の内容と趣旨を紹介する。式が進むに従って、壇上のドブレツォフ氏らの席の前には、贈り物の山ができあがっていくのである。我々の出番は、2日目の午後の外国の大学関係者の祝辞の際に与えられた。どうやら祝辞の順番は、壇上にいる総裁が自分でその都度決めているようであった。それがシベリア風なのであろうか。ドブレツォフ総裁はかつて東北大学を訪問されたことがある。式辞の代読が終わると、壇上の総裁が歩みよられ、自ら東北大学を会場の参加者に紹介された。

アトラクションでは、シベリア支部の歩みを紹介したスライドショーも見ることができた。ノヴォシビルスク郊外の森林を切り開き、広大な敷地にアカデミー・タウンを作り出すという大事業である。日本の筑波学園都市のモデルになったとのことであるが、国家と研究・教育の関係を考えさせるものであった。

式典に先立って5月30日にはシンポジウムが開催され、その一部を聴講した。そこではドイツの財団による報告がなされたほか、式典でも英国のロイヤル・アカデミー代表の挨拶や、中国・韓国の代表挨拶があり、国際的交流の進展が知られ、東北アジアにおける学術交流の近未来の姿をかいま見た気がした。

最近のセンター研究会・講演会

東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所 第1回学術交流連携講演会の報告

初夏の北海道において、伊達市噴火湾文化研究所との協定に基づく第1回の学術交流連携講演会が実施されました。東北アジア研究センターでは、国内外の研究者や市民に所属教員の研究成果を公表するため、定期・不定期の講演会や研究会を実施しています。今回は、仙台圏外の一般市民を対象として、初めて伊達市噴火湾文化研究所との共催で講演会を開きました。会場は噴火湾を望む、だて歴史の杜カルチャーセンターで、明治初めの亘理伊達氏らの足跡を伝える開拓記念館の向い側にあります。

東北アジアからの講師は2人、谷口宏充教授と平川新教授が当地へ赴きました。講演に先立って、伊達市の有田勉教育長が東北アジア研究センターと伊達市との間で学術交流協定を結び、その一環として本日の講演会が設定された旨の紹介をしました。その後、さっそく1人目の谷口教授による「中朝国境の活火山白頭山はいま」の講演に入りました。谷口教授は、地元の有珠山の例を引きながら、画像を紹介しつつ国内・国外火山噴火の状況、渤海王国滅亡前後の白頭山での噴火、現在の火山調査の方法などを、いくつかのセクションに話題を分け、火山研究の意義をわかりやすく紹介しました。昭和新山のふもと町ということもあり、参加した市民は眼を大きく見開いて聞き入っていました。しばしの休憩の後、2番手の平川教授が、「開国以前のロシアと北海道」と題して、江戸時代の日露関係の歴史を、ロシア側からの対応を基軸とし、漂流民やロシアの日本語学校などに焦点をあて、ややもすれば大黒屋光太夫や日本側の視点に傾きがちな従来の日露関係を、ロシア側資料によって、立場を変えた視点から解き明かしました。話の間に、戦後の日本歴史学界で支配的であった江戸時代はお役人様と人民との緊張的対峙が社会の基本構造であったとする歴史観について言及し、それは一面的なもので、江戸幕府体制が250年つづく背景には、協調的な社会構造もあったというような歴史学全般に亘る事柄にまで話がひろがり、「水戸黄門」的世界に慣れた聴衆に驚きを与えていました。

今回、第1回の学術交流連携講演会ということで、センター側も力を入れ、講師・司会者の他、事務から伊藤・前川・酒井3女史の派遣を得、手不足の伊達市の事務局側に合力したことにより、講演会をスムーズに運営することができました。聴講者は伊達市側の発表数に拠れば60名強、市内の他、室蘭などから来られた方も多かったようです。伊達市で製作したポスターの他、開催前日の北海道新聞などにも紹介記事が大きく出ていました。講演会を総括された噴火湾文化研究所の大島直行所長は、次回以降は、聴衆は更に倍、3倍にと力説していました。しかし、相対的に人口の少ない南北海道、無理をせず、互いに長く有用な交流をつづけ、100年前、亘理の人々が当地の人々にいただいた心遣いに答えれば良いのではないかと思います。所長大島直行氏によれば、伊達市の文教政策は20年、30年先を見すえたもので、とりわけ人材育成に力を入れているとのこと。今回の本センターの活動は一つの知的貢献として、当地の地域活性化に多少なりとも有効に作用するでしょう。

当日、大島所長から直々に研究所秘蔵の藤田嗣治ゆかりのシャーマンコレクションをご披露いただきました。外部公開をする時は、協定先の本センターのみがその任を担えるとの言もいただいております。

（磯部　彰）

プロジェクト研究部門　研究会

ワークショップ777
「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」第1回研究会開催

本年4月より、プロジェクト研究部門として発足した「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」の主催による第1回研究会が「ワークショップ777」と題して7月7日(土)・8日(日)の両日、センター4階の大会議室で開催された。同プロジェクト研究部門は、モンゴル族、満州族、漢族等の東北アジア諸民族が用いてきた文字資料をコンピュータやインターネットで利用するための理論・技術・応用を研究することを目的としている。今回のワークショップは「モンゴル語のローマ字転写と翻字に関する諸問題」というテーマのもとに、モンゴル文献学およびその電子化利用の分野で研究を行い成果をあげている7名の研究者による報告とコメント、さらにそれを基にした討論が行われた。「ワークショップ777」の名称は、開催日(07年7月7日)にちなんだものである。

今回のワークショップは、「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」の発足を記念して、2日間の日程で、モンゴル人研究者も交えて、広く研究者・サークルに公開された形で企画された。中国から参加を予定していた内蒙古大学の徳力格尔(デルゲル)教授は、残念ながら来日が間に合わず、あらかじめ寄せられていた発表原稿を包聯群(ホウ・レンチュン)客員研究員が翻訳・代読した。

ワークショップには総計30名以上の参加があったが、きわめて専門的なテーマの上に、センターの地理的な便宜を考慮すれば、極めて盛会だったと言うことができる。ワークショップではそうした熱心な参加者を交えて、活発な討論が行われた。

[ワークショップ777　プログラム]

■7月7日(土) 14:00～18:00

- モンゴル文語のPoppe (1954) 式ローマ字転写の特徴と問題点－円唇母音のローマ字転写の問題に寄せて－
  栗林　均(東北大学)
- Ligeti式ローマ字転写とウイグル式翻字について
  －前古典期モンゴル文語の転写と翻字－
  松川　節(大谷大学)
- アルタンハーン伝、オロンスム文書、ハラホト文書研究の経験から
  井上　治(島根県立大学)
- アラビア文字表記モンゴル語のローマ字表記
  斎藤純男(東京学芸大学)
- コメント
  角道正佳(大阪外国語大学)

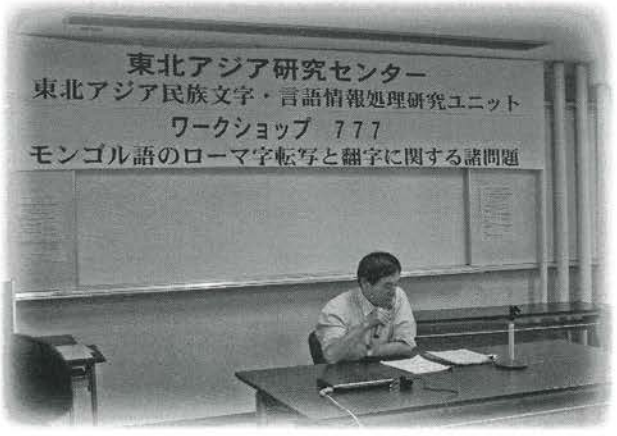
■7月8日(日) 10:00～12:30

- 『中国蒙古文古籍総目』と『蒙古文甘珠爾丹珠爾目録』の書名のローマ字転写について
  徳力格尔(デルゲル)(内蒙古大学)
- コメント
  孟達来(ムンフダライ)(中国社会科学院, 東京外国語大学)
- 総合討論

同プロジェクト研究では、今回のワークショップの報告をもとに、モンゴル語のローマ字転写に関する論文集やハンドブックをまとめて出版することを企画している。

(栗林　均)

ワークショップ会場風景



3つの報告に対して詳しいコメントを述べる角道教授

東北大学東北アジア研究センター・プロジェクト研究部門「北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究」第1回研究会

本研究会は、平成19年6月23日、本年度から立ち上られた同名の研究プロジェクトの第1回研究会として開催された。このプロジェクトは、近代東北アジアの歴史的展開において重要な役割を果たした前近代帝国統治の諸特質、特に北アジアに淵源する帝国であった大清国の統治構造とこれに起因する諸問題の解明を目的とするものである。第1回研究会では、講演一件と研究発表三件が行われた。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所研究員で、東北アジア研究センター客員教授として滞在中のソドノム・ツォルモン氏による講演「ズーンガル・ハン国建国の諸問題」は、17世紀から18世紀半ばまで、中央アジアで強盛を誇ったズーンガルの建国時期と、その首長であったガルダンのハーン号の性格について論じた。続く研究報告では、包格日勒図氏が「清末内モンゴル西二盟蒙旗墾務局の構成と役割について」と題して、清末新政策時期の西部内モンゴル開墾の実施機関である墾務局の成立経緯と職員構成を分析し、それが山西・陝西省が人員と経費を供給し、開墾業務に当たったものであることを論じた。鈴木仁麗氏「満洲国初期の興安省政策とその『自治』――『旗制』と『自治県制』の比較検討――」は、満洲国におけるモンゴル人を対象とした旗制と一般の「自治県制」の内容を比較しつつ、異なる文脈から制度化される両者それぞれの特質を論じた。岡洋樹「満洲の対モンゴル政策とチャハル部の服属」は、清初太祖・太宗期におけるチャハル部の服属過程を検討しながら、王族に率いられて投降した集団・ザイサンなどの官員により率いられた集団・エジェイ自身とともに服属した集団の三つのグループが存在し、それぞれ満洲側の対応が異なったことを論じた。各報告には、会場から質問が寄せられ、活発な討論が行われた。（岡洋樹）

日本館便り

5月31日から6月1日にかけて、ロシア科学アカデミー・シベリア支部の設立50周年記念式典が行われました。5月31日は主にシベリア支部に関わる研究者の集いであり、6月1日は外部の人々を招いての式典でした。二日目の式典には、ドブレツォフ・シベリア支部総裁、ロシア科学アカデミー副総裁、イワノフ副首相、フルセンコ教育科学大臣、トロコンスキー・ノヴォシビルスク知事と錚々たる顔ぶれが揃いました。イワノフ副首相はプーチン大統領からの祝辞を代読しました。時の副首相であり、次期ロシア大統領の有力候補の一人がシベリア支部50周年記念に訪れたことは、シベリア支部の研究活動をロシア政府が積極的に支援していることを意味します。

イワノフ副首相の代読が終了すると、休憩が取られ第2部に移りました。ここでロシア風の式典が現れます。日本では式典は厳粛かつ短時間で行われますが、ロシアでは必ず遊びの要素を含めます。長々と祝辞が述べられる間に、コンサートを入れるのがロシア式です。今回の50周年式典でも様々なコンサートが行われました。式典のフィナーレを飾ったのは、ヤクーツクの若者の弦楽合奏団の演奏であり、見事でした。10代の少年少女からなる、この合奏団の腕前はプロ以上の水準に達しており、バイオリンの強力な指導者がヤクーツクにいることがわかりました。

（塩谷昌史）

・・・最近のセンター出版物・・・

◆岡洋樹編『モンゴルの環境と変容する社会：東北大学東北アジア研究センター・モンゴル研究成果報告II』（東北アジア研究センター叢書第27号）

本書は、2006年2月19～20日に開催された国際シンポジウム「モンゴルの環境と変容する社会」の報告論文集である。レーダ技術による地下水計測、リモートセンシング、文献資料などの環境情報をテーマとする第一部「環境情報：観測技術と方法」、植林・鉱山開発・牧地利用を扱う第二部「モンゴル草原の環境と人の役割」、宗教・経済・地理・言語の社会変容を論じた第三部「モンゴルの変容する社会環境」から成り、理系・文系の研究者による計14本の論文が掲載されている。これらの研究は、1999～2006年に科研費の補助を受けて文理の研究者連携のもとにモンゴルの環境を多面的に解明しようとした研究プロジェクトの成果である。（岡洋樹）

◆明日香壽川編『シンポジウム「地域協力から見えてくる地球温暖化」』（東北アジア研究シリーズ8）

地球温暖化問題は国際交渉で活発に議論されているが、実際に温室効果ガスを削減する、あるいは、顕著になりつつある温暖化の影響に適応するときは、地域が主役になる。本シンポジウムでは、アジアのエネルギー問題や環境問題の専門家をスピーカーに呼び、そうした地域構造に即した視点から地球温暖化を見てみるとどのように見えてくるのかを考えることを目的とした。パネル・ディスカッションでは、「中国が省エネなどのエネルギー安全保障のための政策を実施することを、中国および国際社会が温暖化対策の文脈でそれをどのように認識するべきか（例：気候変動枠組み条約の中での省エネ対策の再定義）」「日中協力として何ができるのか」などが議論された。（明日香壽川）

◆磯部彰編『東シナ海近世現代出版文化研究』（東北アジア アラカルト第17号）

本アラカルトは、ニュージーランドの研究者が、敗戦後の沖縄とそこに住む人の姿を沖縄出身の作家目取真俊を通して分析した研究「歴史・記憶・物語　目取真俊の小説を通して見える世界(おきなわ)」と、朝鮮朝で印刷された中国六朝時代の『文選』五臣注本を宋版や平安鈔本などと比較した書誌的研究から成る近世と現代の出版文化論集である。対象としたエリアは東シナ海沿岸地域と広く関係するため、論集の頭に「東シナ海」を冠した。（磯部彰）

◆山田勝芳編『松本健一「アジア主義と大東亜戦争―北一輝・大川周明・石原莞爾・中野正剛―」（東北アジアにおけるユートピア思想と地域の在り方研究会　講演会記録）』（東北アジア　アラカルト第18号）

本書は、2006年12月13日に開催された松本健一麗澤大学国際経済学部教授による共同研究講演会の記録であり、当日配布した資料についても整理の上、付載したものである。東北アジアのユートピア的・理想的思想に踏み込んでいった場合、日本がアジアと関わる中で打ち出した「アジア主義」「大東亜」という「理想」の究明が不可欠である。これについて、特色ある思想と行動を示した北一輝以下を取り上げて多面的に論じたのが本講演であり、東北アジアの20世紀前半の歴史研究にとって非常に参考になる。（山田勝芳）

客員教授紹介

ウラジミール ロマノビッチ ベロスロドフ教授

ウラジミール ロマノビッチ ベロスロドフ先生はロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所教授 固体統計熱力学研究部門長として、固相状態における理論物理学的研究の分野で主導的立場にある。これまでに、2002年10月～2003年2月と2004年11月～2005年2月の2回、本センター客員教授として着任した。この間に東北大学のスーパーコンピュータを利用した分子モデルのシミュレーション開発の共同研究を行い、10本以上の国際学術論文を発表し、結晶構造の解析や新しい材料開発の基礎研究に貢献している。

今回の招聘はベロスロドフ先生の科学学術の見識のもとに、旧ソ連崩壊以降のロシアにおける戦略的な科学学術の研究を調査し、その結果を本年4月に発足したプロジェクト研究で構築する北アジア戦略データベースに反映させるものである。現在ロシアは科学特区を設け急激に発展する科学技術に力を注いでいる。特にベロスロドフ先生が所属するロシア科学アカデミーシベリア支部には大きな期待が寄せられているため、このような科学学術の変遷を身を持って体験した先生の調査は信頼性が高いと期待される。

また、ベロスロドフ先生の仙台での生活は、ご子息が金属材料研究所の教員のため市内の自宅に同居している。日本での短い期間の3世代家族生活を楽しみながら、この4月に高校に入学したお孫さんと毎朝一緒に川内方面へ通勤している。(工藤純一)

イグナティエヴァ　ヴァンダ教授

7月1日、ロシア・ヤクーツク市からサハ共和国アカデミー人文科学研究所政治学社会学部門長のイグナティエヴァ　ヴァンダさんが、東北アジア研の客員教授として赴任されました。9月30日までの3ヶ月間の滞在です。イグナティエヴァさんの専門は社会学・民族政治研究で、ロシアの民族問題とくにシベリアの少数民族問題に関する政治社会学的分析を行ってきました。とくにロシアとサハの関係史をふまえた現ロシア連邦サハ共和国における住民の政治行動とエスニシティに関する定量分析では定評があります。主な業績（単著）として『ヤクーチア住民の民族構成:民族統計学的研究』[露文]（ヤクーツク、1994年）『サハ共和国（ヤクーチア）:民族政治の歴史に関わる回顧と展望』[露文]（ノボシビルスク、1999年）があります。受け入れ教員の高倉が編集した東北アジア研究叢書13号や東北アジア研究シリーズ（外国語）6号にも論文が所収されています。東北アジア研客員教授としての研究テーマは「サハ共和国近代化における経済ナショナリズムと民族対立:民族政治の動員過程」です。サハ共和国はロシアにあってダイヤモンドや金・天然ガスなどの資源の宝庫ですが、その利用をめぐる中央政府と地方政府・民族対立を歴史的に分析しようというものです。梅雨の仙台ですが、街の美しさがとても気に入ったそうで朝夕散策するのを楽しみにしているとのことでした。(高倉浩樹)

新メンバー紹介

佐藤大介教育研究支援者（プロジェクト研究部門「歴史資料保全のための地域連携」）

本年5月より、本センターの教育研究支援者となりました佐藤大介です。

私が担当しているのは、本センターのプロジェクト「歴史資料保全のための地域連携」です。2003年7月に発生した宮城県北部地震に際しては、多くの方が被災されるとともに、地域に残されていた貴重な歴史資料が数多く失われました。この経験をふまえ、プロジェクトでは将来高い確率で発生することが予想される宮城県沖地震に備えた「災害「前」の防災対策」をスローガンに、地域の方々や仙台地区の研究者や学生との交流を通じて、地域社会と研究機関との新たな協同関係について模索しています。

私自身の研究テーマは、19世紀日本列島各地に登場した「地域リーダー」たちの政治的力量について、奥羽地方をフィールドに分析しています。最近ではプロジェクトとの関係もあり、食糧確保や郷土防衛といった地域社会の危機管理において、彼らの果たした役割と意識について注目しています。本センターの皆様からもいろいろご教示をいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

包聯群（ホウ・レンチェン）教育研究支援者（プロジェクト研究部門「東北アジア民族文字・言語情報処理ユニット」）

1997年に中国内モンゴル大学から留学生として来日し、東京外国語大学の研究生、東京大学の修士・博士課程を経て、本年4月より東北アジア研究センターの客員研究員、5月から教育研究支援者になりました。東京大学に在学中、2001年に消滅に瀕する満洲語の研究で、2003年には契丹文字の研究で(財)日本科学協会・笹川科学研究助成を受けました。博士論文では主に中国黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティー言語を対象として、社会言語学の視点からモンゴル語と中国語の言語接触、言語変異の実態を研究しました。今後は、更に対象地域を拡大して、中国東北地域のモンゴル族コミュニティー言語における中国語・満洲語との接触や、変容しつつある言語の実態を取り上げて、社会言語学における理論的構築に貢献することを目指しています。

東京から仙台にきてびっくりしたことがあります。仙台は東京と違って、自転車でどこにでも行けるのがとても楽しいです。旅行が好きなので、仙台の名所をいろいろ見学したいと思っています。

小野寺歌子教育研究支援者（プロジェクト研究部門「前近代における日露交流史料研究ユニット」）

2007年5月から本センターで教育研究支援者として勤務している小野寺歌子です。専門はロシア文化史で、18世紀後半～19世紀前半におけるロシア帝国の文化史、とくに貴族層の教育文化について研究しています。ヨーロッパの辺境に位置するロシアがピョートル一世以降の西欧化と勢力拡大によってヨーロッパ列強へと成長を遂げていく時代にかんして、貴族が帝国の統治機構の中で果たした指導的役割や貴族の社会構成の変化、そして貴族教育文化の変容プロセスとの相互関係を解明することをめざしています。

本センターではプロジェクト研究「前近代における日露交流史料研究ユニット」において、鎖国時代の日本とロシアの接触や交流を示すロシア側史料の翻訳・編集作業に携わっています。昨年度に刊行した東北アジア研究センター叢書『ロシア史料にみる18～19世紀の日露交流』第2集にひきつづき、本年度中に第3集の刊行を予定しています。ロシア文化史を専門とする立場から東北アジア地域研究の進展に貢献ができればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです（不定期）。

今回は、異業種交流グループ活動での豊富な経験とそのネットワークを母体に、‘想像から創造へ’を社是として設立されたユニークな会社、ソートR&D（株）代表取締役の疋田朋幸氏に登場をお願いしました。
東北大学工学部奉職時には著名なロシアの学術図書を翻訳出版されるなど、ロシア語が堪能な物理学者であると共に、地元の異業種交流グループ活動の指導で数々の実績を残され、大学在職中の2002年に産学官活動の実践を行うべく現在の会社を立ち上げられました。

ソートと仙露研と東北アジア研

ソートR&D株式会社　代表取締役　**疋田　朋幸**

ソートは現在私が代表取締役をしている会社のことであり、仙露研は仙台ロシア語研修会の略で別名ルースカヤ・シュコーラとも呼ぶ。東北アジア研は説明の必要はない。これらはみなロシアと深いかかわりがあり、私の生活とは切り離せない。東北アジア研については2006年３月東北大工学部を退職するまでの数年間この棟の全学教育の講師室にお世話になったという経緯もある。物理学と英語を教えていたのである。物理をやりながら英語というのはおかしいのだが、全学教育になみなみならぬ情熱を持っていたため志願したのである。といえば聞こえはいいが、暇だったからというのが真相なのだが。

子供のころからソ連に関心を持ち、いずれは実務的な分野で交流を持ってみたいという希望をもっていたが、どう展開していいのか分からない。勉強のつもりで異業種交流会のような会に幾つか首を突っ込んでいるうちにソート’８６なる交流会にトラップされてしまった。これが会社を作り、面白い変化をとげている。幸いロシアに関心を持ってくれる人もいて３度ほどロシア視察を行っている。昨年のノボシビルスク訪問時には東北アジア研シベリア連絡事務所に駐在中の塩谷さんに大変お世話になった。

写真１：ソートR&D株式会社の基盤組織ソート’８６の20周年記念写真（本年3月）

仙露研については全く偶然に国際センターでロシア語教室を開催しているグループがあることを知り、６年ほど前から通うようになったのである。加賀谷秀男さんというシベリア抑留帰りの方が25年ほど前から続けてきたものらしい。レベルもまちまちなのが一緒に授業を受けて好き勝手なことを言い合っているのが実に楽しい。しかし、東北大の学生が聴講に来たりするので、あまりいい加減なことは出来なくなった。まったくの入門者は私が教え、中級以上はラーダ先生にお願いしている。この教室は本来、仙台市の国際交流協会のボランティア組織の所属なのだ。しかし、どういうわけかこの組織は本年３月で中止となった。私としては放っておくわけに行かないので、わが社に事務所を置いて活動を続けることにしたのである。

写真２：仙台ロシア語研修会（ルースカヤ・シュコーラ）の皆さん（仙台国際センターの教室にて）

会社はあるし、ロシア語のネイティブや、優秀な人材にもめぐまれており、ロシアビジネスなどには絶好の条件が整った。ロシアはなんと言っても巨大な国土と計り知れない資源に恵まれた国だ。日本にもっとも近い隣国であり、国民の教育レベルも高い。協力すれば日本に利することは大きいと思うのだが、政治的に難しい問題があるのは残念だ。しかし、慎重に粘り強く交流を続ければ必ず道が開けるものと信じている。

編集後記

岡洋樹 副センター長のロシア科学アカデミー・シベリア支部創設５０周年記念式典の報告、ありがとうございました。今回は井上総長の祝辞代読の大役を無事に果たし、本当にお疲れ様でした。また、ソートR&D株式会社　疋田朋幸代表取締役の意欲的なご活躍のご報告ありがとうございました。益々のご発展を期待いたします。　（工藤　純一）

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）　第34号　2007年9月15日発行
発行　東北アジア学術交流懇話会

〒980−8576　宮城県仙台市青葉区川内41番地　東北大学東北アジア研究センター気付
PHONE 022-795-7580　FAX 022-795-6010
http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/　E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp